

金融論の研究や教育における保険への関心

名古屋大学大学院 家 森 信 善

アブストラクト（400文字以内）

保険論の重要な隣接分野に金融論がある。また、現実の保険会社の活動も金融業の一部と認識されることが普通である。そこで、本稿では、保険と金融の2分野の研究や教育におけるシナジーを実現するために、金融論の研究や教育においてどのように保険が扱われ、どのような保険の側面に関心が持たれているのかを明らかにする。具体的には、第1に、金融論の大学レベルのテキストで保険がどのように扱われているかを、その取扱いの歴史的な変化も含めて、調べる。第2に、金融研究においてどのような保険の側面に関心を持たれているのかを、日本金融学会での報告タイトルを題材にして明らかにする。最後に、アメリカを中心とした世界の保険研究では経済学の影響が強いことがよく知られているが、どのような分野が保険研究に影響を与え、どのような点が研究されているのかを、先行研究に基づいて紹介する。

キーワード（3語以内）

金融論、保険論、金融教育

1. はじめに

規制緩和や金融技術の発達により、保険会社の業務と、銀行や証券会社の業務との境界は重なってきている。2009年6月に、アメリカ政府が公表した規制改革プランでは、有力保険会社については中央銀行の監督を受ける仕組みが提案されるなど、融合化の現実を受け入れて規制体系を改革しようという動きもある。

本稿は、保険論の隣接領域である金融論（および経済学）の分野で、「保険」がどのように教育され、研究されているかを明らかにすることを目的にしている。このことを行う理由は大きく2つあると考える。

第1に、実体経済の進展と裏腹に、われわれ研究者は当該分野での業績評価が決定的に重要である。そのため、当該分野の専門論文を読むのが先決で、隣接領域の研究結果ですら必ずしも十分に吸収できていないことが多い。そもそも分野が異なると、方法論や用語

法が異なり、比較研究を行うこともそれなりに手間がかかることが多い。筆者はたまたま金融論の研究者の中では保険分野についてもかなりの時間を使って研究している。それゆえ、金融論の議論の中から保険関係の議論を抽出する点で多少の比較優位があるのではないかと思っており、この点での貢献を試みたいというのが第 1 の理由である。

第 2 に、多くの金融学者や経済学者は、「保険が何であるか」についてはほとんど意識せず、むしろ自明なものとして研究や教育をしているのが実際であろう。しかし、彼らの分析の前提になるような保険に関する先行研究が欠けていて、議論の基礎が不十分になっているケースもある。彼らの関心は保険そのものの解明ではないだけに、学術研究上の分業が進展する余地が残されていると言える。とくに、現在では、どの程度、他の研究に引用・参照されているかが重要な研究評価のメルクマールになっているが、金融・経済学者が何を知りたいと思っているのかがよくわかれば、保険に関して有利な立場にある保険学者は、多くの研究に引用されるような研究成果を出すことが容易になるであろう。これは、保険学者の学術界における地位を大きく向上させることになるであろう。

こうした目的を持って、本稿では、具体的には、次の 3 つの調査を行うことにした。

第 1 に、金融論の「教育」において保険がどのように位置づけられているかである。具体的には、過去 50 年ほどの間に出版された 50 冊の大学レベルの金融論の教科書から、保険に関する記述を抽出して分析するというスタイルをとった。

第 2 に、金融論の「研究」において保険のどのような側面が分析対象になっているかを調べることにした。これにより、金融学者が保険のどのような部分に関心を持っているかを明らかにできるであろうし、保険学者と金融学者の共同研究が発展することも期待できよう。具体的には、1970 年以降の日本金融学会の全国大会報告における「保険」関連の研究を抽出するという作業を行った。

第 3 に、アメリカでの保険研究について先行研究を紹介することにしたい。アメリカでの保険研究は、保険プロパーの領域での研究だけでなく、「経済学」や「ファイナンス」分野の研究の影響が大きい。そこで、世界での経済学や金融論の分野での保険がどのように研究されているかを知るために、アメリカでの研究結果を紹介する。

2. 大学レベルでの金融論の教育における保険

(1) 教育課程における保険の認識

日本の人々がどのように「保険」の知識を吸収しているかは、社会が持つ平均的

な「保険」像を知る上で非常に重要なことであろう。そして、その平均像に歪みや欠落があるのなら、その知識吸収プロセスの改善を図っていかなければならない。

そうした問題意識から、すでにいくつもの貴重な研究が行われてきている。最も新しい研究は、生命保険文化センターが主催された「生活設計と生命保険に関する学校教育研究会」であろう。その成果をまとめた「学校教育における保険教育の現状と展望」（2009年3月）では、小学校レベルでの保険教育に関する分析（近藤恵・東京田中短期大学准教授の論考）、中学校・高等学校レベルでの保険教育に関する分析（尾島恭子・金沢大学准教授の論考）、大学レベルでの保険教育に関する分析（東珠実・椋山女学園大学教授の論考）、および全体を総括する分析（堀田一吉・慶應義塾大学教授の論考）が、それぞれ興味深い議論を行っている¹。

（2）大学教育における金融論と保険論

本稿も同様の問題意識から、大学での保険教育について考えてみたい。東教授の研究との違いは、大学における「保険」関連の科目を分析対象にするのではなく、隣接領域である金融論の教育において、保険がどのように扱われているかを調査することである。

たとえば、科学研究費の分科細目表には「保険学」は表示されていないが、人文社会系—社会科学—経営学—商学のところの付表キーワードに「(E)保険」が明記されており、保険論は商学の重要分野とされている。したがって、商学部・経営学部で保険論の専門的な講義が行われていることは普通であろう。一方、金融論は、人文社会系—社会科学—経済学—財政学・金融論、という分科細目に属しており、この科学研究費の分科細目の分類上は、金融論と保険論はかなり遠いことになっている。したがって、筆者は隣接領域と考えているが、隣り合わせというよりは、少し間があるということかもしれない。

たしかに、保険論は商学部の重要科目であることは間違いがないが、経済学部においては、保険関連の講義が用意されているとは限らないようである。たとえば、図 1には、大学基準協会の「経済学部のモデル・カリキュラム」を掲げているが、「保険」という名称の付く科目は例示されていない²。他方で、経済学部の卒業生はほとんどが産業界・金融界に就職していき、保険会社に就職する者も珍しくない。実際、筆者の所属する名古屋大学経

¹ 小川(2008)も大学における保険教育の詳しい分析を行っている。

² もちろん、大きな経済学部では、経済学部の中に商学科や経営学科を持つこともあり、そうした大きな経済学部では保険論の講義もあろう。また、モデルの中にある社会福祉は、年金や医療保険などをカバーするので、広い意味では保険分野の科目と考えられる。

【平成 21 年度日本保険学会大会】

共通論題「保険概念の再検討」

レジュメ：家森信義

経済学部は学生定員 200 名ほどの小さな学部であることもあって、保険関係の講義は長らく開設されていなかったが、多数の学生が保険会社に就職している。

先に科研費の分科細目で見たとおり、保険論と金融論は遠い関係にあるのかもしれない。しかし、筆者の個人的な経験では、金融論と保険論の両方を研究領域にしている研究者も少なくないことから、金融論教育の中で保険がかなり重要に扱われているのかもしれない。そこで、本稿では、筆者の専門領域でもある金融論の教育において「保険」がどのように扱われているかを調査することにした。

図 1

経済学部のモデル・カリキュラム

				〇〇大学経済学部		単位数
学部必修	世界と日本の経済 I・II		政治経済学 I・II	ミクロ経済学 I	マクロ経済学 I	12
	専門ゼミナール第1部		専門ゼミナール第2部			8
コース名	世界と日本の経済	現代経済と政策	モダンエコノミクス			
コース必修	世界経済 日本経済入門 I・II 8	現代経済 経済政策 I・II 8	ミクロ経済学 II 12 マクロ経済学 II 経済統計学 I・II 経済データ分析 数的処理			(枠内の右 肩数字は 取得すべ き単位数)
コース 選択科目	現代経済 62 経済政策 I・II ミクロ経済学 II マクロ経済学 II 経済統計学 I・II 西洋経済史 I・II 日本経済史 I・II 情報経済論 I・II 財政学 I・II 農業政策 I・II 国際経済学 I・II アジア経済 I・II アメリカ経済 I・II ヨーロッパ経済 I・II 開発経済論 I・II 国際金融論 I・II	世界経済 62 日本経済入門 I・II ミクロ経済学 II マクロ経済学 II 経済統計学 I・II 西洋経済史 I・II 日本経済史 I・II 財政学 I・II 農業政策 I・II 経済学の歴史 現代の経済学 社会福祉 I・II 労働政策 I・II 環境経済学 I・II 民法 I・II 金融論 I・II	財政学 I・II 58 労働経済学 応用ミクロ経済学 国際経済学 I・II 産業組織論 I・II 公共経済学 I・II 計量経済学 I・II 経済数学 I・II ゲーム理論入門 国際金融論 I・II 金融論 I・II			

(コース選択は二年次に始まる)

(出所) 大学基準協会「経済学教育に関する基準」資料第 59 号 2004 年 8 月。

(3) 調査方法

調査方法としては、過去 45 年ほどの間に出版された金融論の大学レベルのテキストを対象にして、「保険」がどのように記述されているか(記述されていないという事実も含めて)を調べていくこととした。まず、Webcat Plus を使い、「金融」をキーワードにして、出版年を 1960~2008 年に制約して検索したところ、4 万を超えるヒットとなってしまった。そ

ここで、主要な出版社を 15 社ほど選定して絞り込みを行い、その後は、1 件ずつ確認していった。また、それでは漏れるものもあったことから、筆者のこれまでの金融論教育の経験から気がついたものを補足していくこととした。

しかし、金融論の教科書の完全なリストを作ることが目的ではないことから、テキスト選定作業は完全なものとはなっていない。意図せざるをして、重要な金融論のテキストが落ちていることがあり得ることをあらかじめ断っておきたい。

次に、リストアップされたテキストの現物の索引を一つ一つ見ていくことにした。「保険」、「生命保険（会社）」、「損害保険(会社)」のキーワードが索引に載っている場合には、該当ページの記述をさらに読み、内容を整理するという作業を行った³。なお、索引のないものについては目次から該当箇所を探してみた。なお、版を重ねているものは、たまたま名古屋大学の図書館で利用できるバージョンを使っており、すべてのバージョンをチェックしているわけではない。

(4) 調査結果

その結果を一覧表にまとめたのが、表 1 である。顕著な特徴は、1987 年頃までに出版された金融論のテキストでは「保険」はほとんど触れられていない。触れられているとしても、生命保険会社があるという程度の記述がほとんどである（表中の△表示）。1990 年前後に出版されたテキストで以前よりは長めの記述がみられるようになり、1995 年以降になると「保険」にある程度の記述を行っている金融論のテキストが増えている。

もう少し詳しくみていくことにしよう。1988 年までの古い時期のテキストで、保険について比較的詳しく取り扱っている小寺（1969）では、「保険会社も生命保険あるいは損害保険を目的とする機関であるが」「金融としても大きな役割をはたしている。」と述べ、生命保険会社と損害保険会社の資産運用残高やポートフォリオの構成を、具体的な数値で説明している。また、川口（1979）では、「保険会社は」「保険料の払い込みを受け、事故が発生した場合に契約された保険金を支払うことを本来の業務としている。」「しかし、払い込まれた保険料は事故発生に備えて積み立てられ、」「保険会社は長期金融機関としての側面を持っている。」と説明している。

1990 年前後のテキストとして、塩澤（1991）をとりあげよう。そこでは、保険会社に生保と損保があること、免許が必要であることを述べた上で、「保険商品・サービスの提供と

³ 預金保険制度に関する説明は、対象外とした。

【平成 21 年度日本保険学会大会】

共通論題「保険概念の再検討」

レジュメ：家森信義

いう本源的業務のほかに、産業資金の供給主体および機関投資家としての役割を担っている。」と説明している。そして、生命保険会社と損害保険会社の資産運用の状況についてそれぞれ 10 行程度ずつで説明している。同時期の呉（1989）は、それ以前の金融論の教科書と比べると格段に保険に関する記述が長くなり、1 ページを多少超えて説明が行われている。保険会社に生保と損保があること、免許が必要であること、資金運用の機能があること、資産運用の状況などが説明されている。それに加えて、保険の発展の経緯（歴史）についても非常に簡単であるが触れている。

1995 年以降になると、保険に関しても研究している家森の関与するものは別にしても、保険に関する一定程度の記述が行われている方が普通になっている。扱っても数ページに及ぶものもある。島村・中島（2009）は、呉（1989）の改訂版であるが、保険に関する記述が約 4 ページにも達しており、かなり詳しくなっている。岩田（2008）は、保険会社の機能について説明するほか、「保険制度とリスク回避」という節を設けて、保険制度を逆選択やモラルハザードの観点から理論的に説明している。また、前多ほか（2006）でも、保険会社というユニット（通常のテキストの節に相当）を設けて、①金融仲介機関としての保険会社の機能と役割、②保険会社の資産運用、③金融自由化と保険会社、について合計で 8 ページの説明が行われるようになっている。

以上をまとめると、金融論のテキストの中で、保険関連の記述は時代とともに増えてきている。これは、金融論の研究関心が、純粋な理論的な分野から金融制度に広がってきたことを反映しているだろう。それに加えて、保険会社が金融市場で大きなウエイトを占めるようになったことや、保険会社の破綻が家計に影響することが増えたこともあろう。

また、「保険」についての記述を調べていくと、当初は、保険会社が金融市場において大きな役割を担っていること（端的には運用資産の額）に関心があったが、1990 年代後半以降になると、家計の資産選択面で保険を取り上げるものや、金融自由化の中での保険商品の多様化や保険市場の競争の高まりについて説明しているものも出てきた。

表 1

金融論教科書における「保険」の記述

No	出版社	タイトル	編著者名	出版年	保険関連の記述
1	有斐閣	金融論	新庄博	1965	×

【平成 21 年度日本保険学会大会】

共通論題「保険概念の再検討」

レジュメ：家森信義

2	東洋経済新報社	金融論入門	小寺武四郎	1969	△
3	岩波書店	金融	館龍一郎・浜田宏一	1972	×
4	有斐閣	金融論入門	田村茂ほか	1975	×
5	中央経済社	現代の金融	山崎研治	1978	△
6	春秋社	金融論入門（第2版）	川口慎二	1979	△
7	有斐閣	テキストブック金融論	原司郎	1980	×
8	マグローヒル好学社	金融論	永谷敬三	1982	×
9	東洋経済新報社	金融論	山崎研治	1983	×
10	東洋経済新報社	金融	岩田規久男、堀内昭義	1983	△
11	有斐閣	現代金融論	則武保夫、三木谷良一	1984	×
12	有斐閣	金融	池尾和人ほか	1987	×
13	日本経済新聞社	ゼミナール現代金融入門	斎藤精一郎	1988	△
14	新世社	金融論	日向野幹也、金谷貞男、柳田辰雄	1989	×
15	東洋経済新報社	実践ゼミナール 日本の金融と銀行	鈴木淑夫ほか	1989	△
16	東洋経済新報社	金融読本（第18版）	呉文二	1989	○
17	東京大学出版会	金融論	堀内昭義	1990	×
18	慶應通信	金融論	塩澤修平	1991	○
19	J I C C 出版局	金融・入門	翁邦男、植田和男	1991	×
20	日本評論社	現代金融論	岩田一政	1992	×
21	中央経済社	現代金融入門	千田純一、相山孝金	1993	×
22	有斐閣	金融論（初版）	柴沼武ほか	1993	×
23	東洋経済新報社	実践ゼミナール 日本の金融	鈴木淑夫、岡部光明	1996	○
24	八千代出版会	金融論	石野典	1996	○
25	岩波書店	金融	小野善康	1996	×
26	中央経済社	日本の金融システム	千田純一、岡正夫、藤原英郎	1997	○
27	東洋経済新報社	金融	貝塚啓明、奥村洋彦、首藤恵	1997	○
28	東洋経済新報社	金融	黒田晃生	1999	△
29	東洋経済新報社	テキストブック現代の金融	古川顕	1999	○
30	有斐閣	はじめての金融	本多佑三	2000	△
31	東洋経済新報社	金融	筒井義郎	2001	○
32	中央経済社	金融論入門	藤原賢哉、家森信善	2002	◎
33	勁草書房	金融	内田滋、西脇廣治	2002	○
34	有斐閣	現代金融論	川波洋一、上川孝夫	2004	△
35	新世社	コア・テキスト金融論	竹田陽介	2005	×
36	中央経済社	テキスト金融のメカニズム	堀江康熙ほか	2006	×
37	東洋経済新報社	入門金融（第4版）	黒田晃生	2006	○
38	日本評論社	金融論	村瀬英彰	2006	○
39	晃洋書房	知っておきたい金融論	安孫子勇一	2006	×
40	有斐閣	金融論をつかむ	前多康男・鹿野嘉昭・酒井良清	2006	◎

【平成 21 年度日本保険学会大会】

共通論題「保険概念の再検討」

レジュメ：家森信義

41	有斐閣	金融論	大野早苗ほか	2007	×
42	東洋経済新報社	金融読本（第 26 版）	呉文二ほか	2007	◎
43	中央経済社	はじめて学ぶ金融のしくみ	家森信義	2008	◎
44	新世社	金融論入門	清水克俊	2008	○
45	東洋経済新報社	金融入門	岩田規久男	2008	◎
46	東洋経済新報社	金融読本（第 27 版）	島村高嘉、中島真志	2009	◎
47	岩波書店	金融（第 2 版）	小野善康	2009	×
48	東洋経済新報社	金融経済入門（第 2 版）	花輪俊哉・小川英治	2009	×
49	昭和堂	現代の金融	藤原洋二	2009	△
50	新世社	グラフィック 金融論	細野薫・石原秀彦・渡部和孝	2009	△

（注）右列の◎、○、△、×は、本文中に「保険」に関する説明がある場合、1 ページを超える場合◎、半ページから 1 ページ程度の場合○、それよりも短い場合△、記述がない場合×、としている。ただし、預金保険制度や、リスク理論の説明で出てくる「保険」は含んでいない。また、基本的に索引を使って該当箇所を探したので、索引に上がっていないと、見落としている可能性が強い。

3. 日本の金融論研究における保険への関心

金融論の研究領域は、マクロ金融政策、金融システム政策（プルーデンス政策）、ファイナンス、国際金融に分けることができる。保険関係の議論が行われやすいのは、金融システムの領域であろう。たとえば、預金者保護と保険契約者保護、銀行破綻と保険会社破綻といったように、銀行論の中心的なテーマとほぼ並列した保険のテーマがあるからである。しかし、家計の立場で保険と貯蓄をどのように組み合わせるかと言ったような研究は、ファイナンスの領域に属するし、保険会社の外国債券取引が為替相場に影響する様な状況では、国際金融論的な関心から保険会社の行動の分析が行われることもある。このように、金融論の様々な分野で、保険に関連した研究が行われている可能性が考えられる。

そこで、実際に、金融論の領域で保険のどのような側面が研究されているかを調べてみることにした。ただ、金融論研究といっても様々な形で発表されているために、母集団を明確化するのが難しい。ここでは、日本金融学会の全国大会（年に 2 回、すなわち春季および秋季大会が開催されている）での報告タイトルに「保険」が入っているものをピックアップするという手法を採用することにした。日本金融学会の学会報告を事例に選んだのは、発表者が発表の場として日本金融学会がふさわしいと考え、プログラム委員会（かつ

【平成 21 年度日本保険学会大会】

共通論題「保険概念の再検討」

レジュメ：家森信義

では主催校) が日本金融学会での報告を適当と認めたということを意味しており、「金融」の研究と自他共に認定されていることになるからである。

この方針の下で、1970 年以降の全国大会のプログラムを『金融学会報告』(1990 年まで) および『金融経済研究』(1991 年以降)、日本金融学会HP (1999 年以降) に基づいて調べていくこととした。具体的には、大会報告のタイトルに、「保険」「生命保険(生保)」「損害保険(損保)」といった言葉が入っているものを探すことにした。ただし、預金保険は除くことにした。

その結果が、表 2 である。これを見ると、日本金融学会で初めて行われた「保険」関係の報告は 1985 年の小藤康夫先生の報告であった。1985 年以降 5 年ずつに期間を区切ってみると、1980 年代後半 3 件、1990 年代前半 4 件、1990 年代後半 8 件、2000 年代前半 11 件であり、2005 年から 2009 年春までは 1 件もない状況である。

1985 年から 2009 年までの 25 年間で 26 本の報告となっているので、平均的にいえば 1 年に 1 本の「保険」関係の報告が行われていることになる。ただし、報告者別の回数を調べると、小藤康夫先生 6 回、青葉暢子先生 4 回、茶野努、松浦克己、吉澤卓哉の各先生が 2 回となっている。こうした複数報告の先生がおられるので、報告者の顔ぶれは全部で 15 人である。また、報告者の多くは日本保険学会の会員でもあることに気がつく。

つまり、多くの金融学者が関心を持って、保険学会とは無関係に、「保険」を研究しているというよりは、「保険」を金融面から捉えることに関心のある保険研究者が日本金融学会でも報告しているというのが実態のようである。ただし、こうした機会を通じて、保険に関心のなかった隣接分野の研究者にも保険研究のおもしろさや重要性を認識してもらえらるだろう。新規参入が市場の活性化をもたらすのはどの分野でも同じであり、「保険」研究の発展にとって、隣接分野への研究成果の発信は非常に重要なことである。

表 2

金融論研究における保険への関心

いつ	タイトル	所属	氏名
2004 年春	近年の生保一般貸付の決定要因を巡る一考察	ニッセイアセットマネジ メント	高橋智彦
2004 年春	生命保険企業の広告戦略—理論・実証分析—	鳴門教育大学	青葉暢子
2004 年春	保険と金融—間接金融・直接金融との対比—	東京海上火災 保険	吉澤卓哉
2004	生命保険会社破綻と家計・保険契約者の選択	日本経済研究社	白石小百

【平成 21 年度日本保険学会大会】

共通論題「保険概念の再検討」

レジュメ：家森信義

年春		ソナー	合
2002 年春	逆鞘、インフレリスクと変額保険	筑波大学	青葉暢子
2002 年春	ソルベンシー・マージン比率と生保貸出	東京大学	福田慎一
2001 年春	生保企業の資産選択と経営破綻の分析	筑波大学	青葉暢子
2001 年秋	生保危機と逆鞘問題	専修大学	小藤康夫
2000 年秋	情報の非対称性と生保規制－「逆鞘」の発生による生保の経営破綻の応用ミクロ分析－	筑波大学	青葉暢子
2000 年秋	事業活動保険－出資やプロジェクト・ファイナンスとの相違－	九州大学	吉澤卓哉
2000 年秋	超低金利と生命保険業	九州大学	茶野努
1998 年春	生命保険会社の経営と経営危機対応制度	専修大学	小藤康夫
1998 年秋	公的規制が生命保険に与える影響	高千穂商科大学	大野早苗
1997 年秋	生保会社による株式投資の歴史性－1930年代に焦点をあてて－	一橋大学	横山和輝
1996 年秋	米国生保の破綻とその処理	住友生命総合研究所	茶野努
1996 年春	女性の就業と家計の生命保険需要	郵政研究所	松浦克己
1996 年春	生保経営と株式含み益－銀行の株価変動を通して－	専修大学	小藤康夫
1995 年秋	貯蓄動機と生命保険需要－個票データによる実証分析－	名古屋市立大学	福重元嗣
1995 年春	生命保険市場における民間生保と簡保が経済厚生に与える効果	慶応義塾大学	吉野直行
1993 年秋	生命保険とライフサイクル	大阪大学	松浦克己
1993 年秋	生命保険会社の効率性の計測	一橋大学	中馬宏之
1992 年秋	生保会社の配当政策と合同運用	専修大学	小藤康夫
1991 年秋	明治 30 年代における保険会社の金融活動－鉄道企業への投融資・経営参加を中心に－	九州大学	小川功
1989 年秋	生保の外債投資と株式売却	専修大学	小藤康夫
1989 年秋	金融制度改革と生命保険	ニッセイ基礎研究所	簗島則和
1985 年秋	生保の財務貸付と限界供給者の性格	専修大学	小藤康夫

(注 1) 1990 年までは『金融学会報告』、1991 年以降は『金融経済研究』および 1998 年以降は、日本金融学会ホームページ上の過去の大会のプログラムを参照して作成。

(注 2) 連名での報告については、プログラム上、第一番目に氏名が書かれている人物を記載している。

(注3)所属は、報告時点のプログラム等に掲載されているものである。

4. 世界の保険研究の状況

(1) 保険研究のコアを探る 2つの分析手法

アメリカ・リスク保険学会(ARIA)の会長であった University of Wisconsin の Browne 教授は、ARIA の会長講演で、「リスクマネジメントと保険研究の中心的な問題は何かについて、ARIA の会員の多くにとっても必ずしも自明ではない」と指摘し、現代のリスクマネジメントと保険(RMI)のコアとなる研究問題が何かを示そうとした。このように、アメリカの保険学者にとっても、「保険研究のコアの課題は何か」というのは未解明の問題なのである。

こうしたときに、アメリカの研究者が使う手法は大きく 2つある。一つは、その分野の研究者に対して直接尋ねる方法である。たとえば、Browne(2003)は ARIA の歴代会長に対して質問し、1980 年以降に公刊された保険の研究に対して最も影響を与えていると思う論文を答えてもらっている。

もう一つの方法が、主要な保険分野の学術雑誌の掲載論文の動向を分析する方法であり、実際にはこちらの方法をとる研究が圧倒的に多い。前者のアンケート調査では、アンケートの送付先をどう選ぶかで回答者の質や年齢などに偏りが生じる可能性もあるし、回答者の記憶・印象に頼ると、最近の研究が過大評価される可能性があるからである。そこで、以下で紹介するのは掲載論文の情報を使った研究に限定する。

学術雑誌を使う研究でも、掲載されている論文そのものを使うタイプの研究と、掲載されている論文が引用している論文の情報を利用するタイプの研究とがある。いずれのタイプの研究でも、保険論の分野の主要な学術雑誌を定めることが分析の出発点になる。この際、先行する欧米の研究では、保険論としてではなく、「リスクマネジメントとインシュアランス」を一つの分野として分析している例がほとんどである。したがって、本節での以下の分析は、この両方をあわせて保険と呼ぶことにしている。

(2) 主要な保険研究雑誌に掲載された論文の調査

保険に関する研究論文は様々な媒体に発表されている。そのため、保険研究の範囲を定める必要がある。先行研究では、たとえば ECON LIT のように網羅的に収録されているデー

【平成 21 年度日本保険学会大会】

共通論題「保険概念の再検討」

レジュメ：家森信義

データベースではなく、特定の雑誌を選んで分析を行っている。これは、論文の質が一定水準以上であることを保証するためである。ただ、実際に雑誌を選択する上では、いろいろなアプローチがある。たとえば、保険研究者にアンケート調査を実施し、どれが重要なジャーナルであるかを尋ねるということもある (Ferguson et al. [2005] など)。また、特定の雑誌グループを重要な雑誌であるとア priori に決めた上で、その引用調査に基づいてその雑誌グループの中でランキングを作り、上位に位置するものを主要雑誌とするといった方法がある。

本節の議論では、その選び方については、直接的な関心がないので、あまり詳しい説明は行わないが、すべての研究で ARIA の機関誌である Journal of Risk and Insurance (JRI) は主要な雑誌とされている。

さて、掲載されている論文そのものを対象にした研究としては、新しいものでは、Weiss and Qiu (2008) がある。彼らは、JRI の創刊以来の掲載論文を、トピックス別に整理している。その結果は表 3 に示している通りである。

保険数理や損害保険、雇用者給付といった保険領域の固有テーマとともに、保険経済学やファイナンス／リスクマネジメントといった経済学や金融論との境界領域の研究も大きなウエイトを持っていることがわかる。つまり、JRI が保険研究の領域を示すとすれば、経済学や金融論に関連する研究も保険研究として行われていることになる。

【平成 21 年度日本保険学会大会】
 共通論題「保険概念の再検討」
 レジュメ：家森信義

表 3

JRI 掲載論文のトピック別の論文数の 10 年ごとの推移

Number of Articles by Topic Published in the *JRI* by Decade

Article Content	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000–2006
Finance/Risk Management	6	6	15	28	33	37	36	22
Health Insurance/Healthcare	0	6	12	24	7	13	15	14
Employee Benefits	0	3	8	32	21	29	13	24
Property–Liability Insurance	3	7	20	35	58	49	63	46
Actuarial Science	0	1	16	54	49	50	64	29
Insurance Economics	0	0	0	37	28	48	39	35
Life Insurance	5	2	20	67	54	33	27	16
Workers Compensation	0	2	1	6	4	11	20	5
Insurance Education	12	3	12	10	1	1	2	0
Reinsurance	0	0	0	4	4	2	1	4
Industry Insight/Regulation	17	20	51	74	61	21	10	2
Other	0	0	1	7	2	2	6	1
Total	43	50	156	378	322	296	296	198

(出所) Weiss and Qiu(2008)

(3) 引用文献を使った研究

引用文献を使った研究では、たとえば、Browne(2003)は、Journal of Risk and Insurance(JRI)に掲載されている論文において引用されている論文を調べて、引用頻度ランキングをつくっている。第一位は Paul L. Joskow (1973), “Cartels, Competition and Regulation in the Property-Liability Insurance Industry,” Bell Journal of Economics、第二位は、Michael Rothschild and Joseph Stiglitz(1990), “Equilibrium in Competitive Insurance Markets: An Essay on the Economics of Imperfect Information,” Quarterly Journal of Economics、第三位は Jan Mossin (1968), “Aspects of Rational Insurance Purchasing,” Journal of Political Economy、であった。これら上位論文はすべて保険そのものを分析した論文でありながら、保険プロパーの雑誌ではなく、経済学の学術雑誌に掲載されているのである。保険に関する研究が経済学の研究の重要な一分野となることが伺える。

なお、引用頻度上位 10 論文の掲載雑誌は、Bell Journal of Economics (3 本)、Journal of Political Economy(2 本)、Journal of Business(2 本)、Journal of Risk and Insurance (1 本)、Econometrica(1 本)、Quarterly Journal of Economics (1 本) となっており、アメリカの保険研究が、保険研究自身(つまり、JRI)ではなく、幅広い経済学の研究から

【平成 21 年度日本保険学会大会】

共通論題「保険概念の再検討」

レジュメ：家森信義

大きな影響を受けていることを明らかにしている。

同様のことは、Chan and Liano (2009)においても示されている。彼らは、JRI、Geneva Risk and Insurance Review (GRIR)、Journal of Insurance Regulation (JIR) の 3 誌を主要雑誌と決めて、2000 年から 2004 年にこの 3 誌に掲載された論文（総数 284 本）が引用した論文（延べ 5809 本）を調べるという方法を使っている。その際、4 回以上引用されたもののみを取り出すという閾値を設けている。

その結果、頻繁に引用されている研究の分野を整理したのが表 4 である。主要 3 誌に頻繁に引用された論文の研究領域は、おおよそ半分が経済学であり、保険それ自身が 20%、計量経済学が 16%、ファイナンスが 11%となっている。また、頻繁に引用されている論文が掲載されている雑誌のリスト（上位）を示したのが、表 5 である。JRI がトップではあるが、そのほかは経済学、計量経済学、ファイナンス、ビジネスといった分野の雑誌がランクインしている。

このように、世界の保険研究は、経済学などの隣接分野の影響を強く受けており、それらの成果を生かしながら保険の研究が発展していることがわかる。

表 4

主要保険分野の学術雑誌論文に頻繁に引用された論文の研究領域

Discipline	Total Citations	Percentage (%)
Economics (excluding econometrics)	284	46.7
Risk management and insurance	125	20.6
Econometrics	96	15.8
Finance	67	11.0
General business	24	3.9
Actuarial science	8	1.3
Quantitative and statistics (excluding econometrics)	4	0.7

(出所) Chan and Liano (2009)。

【平成 21 年度日本保険学会大会】

共通論題「保険概念の再検討」

レジュメ：家森信義

表 5

主要保険分野の学術雑誌論文に頻繁に引用された論文が掲載されている雑誌

Rank	Publication Outlet	Total Citations Received	%	Number of Distinct Cited Research Works
1	<i>Journal of Risk and Insurance</i>	117	19.2	23
2	<i>Econometrica</i>	96	15.8	12
3	<i>Journal of Political Economy</i>	64	10.5	9
4	<i>Journal of Economic Theory</i>	58	9.5	9
5	<i>American Economic Review</i>	40	6.6	6
6	<i>Quarterly Journal of Economics</i>	26	4.3	3
7	<i>Journal of Business</i>	24	3.9	4
8 (tied)	<i>Bell Journal of Economics</i>	21	3.5	5
8 (tied)	<i>Journal of Financial Economics</i>	21	3.5	4
10	<i>Journal of Risk and Uncertainty</i>	19	3.1	4
11	<i>Journal of Banking and Finance</i>	17	2.8	4
12	<i>Journal of Finance</i>	14	2.3	3
13	<i>Journal of Public Economics</i>	13	2.1	2

(注) 引用回数でランク付けされている。最右列の数字は、論文の数である。たとえば、JPE に関しては 9 本の論文で 64 回の引用があることになる。

(出所) Chan and Liano (2009)。

5. むすび

保険には、保障機能と金融機能がある。保険の機能が保障に中心があった時代には、金融論研究者が保険について研究したり教育したりすることは少なかった。しかし、本稿で明らかにしたように、1980 年代後半以降、金融論の研究や教育において保険への関心が高まってきた。これは、現実の世界での、保険の金融機能が拡大してきたことを反映していると考えられる。

もちろん、多くの金融学者は、保険そのものを研究しているわけではないので、保険プロパーの研究者からすれば、金融学者の議論には不十分な面があることはやむを得ないだろう。しかし、金融学者が保険のどのような分野に関心があり、どのような研究を行ってきたかを保険研究者が知ることは、保険学の発展にとっても意味があると筆者は考えている。経済学者なら誰もが知っている分業と協業の利益を、保険研究の分野でも実現することに、本稿がいささかでも役に立てば幸いである。

<参考文献>

- 東珠実「大学における生活設計と保険教育」『学校教育における保険教育の現状と展望』
(生命保険文化センター) pp. 59-70, 2009年3月。
- 小川浩昭「保険教育と保険学の体系—カリキュラムの考察—」『西南学院大学商学論集』
第55巻第1号 pp. 99-150, 2008年6月。
- 尾島恭子「中学校・高等学校における生活設計教育と保険教育—家庭科における学習内容
の検討—」『学校教育における保険教育の現状と展望』(生命保険文化センター) pp. 49-58,
2009年3月。
- 近藤恵「小学校における保険教育の課題と可能性—保険に関する調査事例を手がかりとし
て—」『学校教育における保険教育の現状と展望』(生命保険文化センター) pp. 35-48,
2009年3月。
- 日本保険学会・生命保険文化センター・損害保険事業総合研究所『大学における「保険分
野に関する教育」についてのアンケート調査報告書』 2008年3月。
- 堀田一吉「保険教育の対象と範囲」『学校教育における保険教育の現状と展望』(生命保
険文化センター) pp. 3-18, 2009年3月。
- 家森信義「実証的な生命保険分析の世界の動向と日本の課題—生命保険に関する実証分析
研究会を終了するに当たって—」『生命保険論集』第167号 pp. 45-80, 2009年6月。
- Browne, Mark J., "Risk Management and Insurance Research: 1980-2002" Risk
Management and Insurance Review 6, pp. 1-61, 2003.
- Chan, Kam C., and Kartono Liano, "Influential Articles, Journals, and Institutions
in Risk Management and Insurance," Risk Management and Insurance Review 12,
pp. 125-139, 2009.
- Ferguson, Tamela D., Mark S. Dorfman, and William L. Ferguson, "Risk Management and
Insurance-Related Journals: A Survey of Risk and Insurance Academics," Risk
Management and Insurance Review 8, pp. 65-101, 2005.
- Weiss, Mary A., and Joseph Qiu, "The Journal of Risk and Insurance: A 75-Year
Historical Perspective," Journal of Risk and Insurance 75, pp. 253-274, 2008.

(なお、金融論のテキストについては、表 1に掲載したとおりである。)